長泉町・さわやかハイキング報告書

通算山行NO	ＮＯ・７６	報告者	井上　弘二郎
年　月　日	２０１０年１月１７日（日・晴れ）	２万５千	山北
山　　名	丹沢前衛・不老山（９２８ｍ）		
体力度＝３・普通　技術度＝３・普通　藪漕＝無し　道標＝ある　トイレ＝谷峨駅・頂上でツエルト　展望度＝◎　三角点＝ない			

冬富士山・冬枯れ・不老長寿の山

コース とタイム	御殿場線・下土狩駅発６：０８～なめり駅発６：１１～裾野駅発６：１５～谷峨駅着６：５２着～発７：００—山市場８：００—棚沢キャンプ場—番ヶ平—不老山１１：３０～１２：３０—駿河小山１５：００—入浴「ふじみセンター」（３００円）～１６：３０—駿河小山発電車１６：４６—長泉
標　高　差	上り　谷峨約１５０ｍ～不老山９２８ｍ＝約７７８ｍ 下り　不老山９２８ｍ～駿河小山約２５０ｍ＝約６７８ｍ
参　加　者	ＣＬ後藤隆徳、植野茂利、堀江義昭、天野和子、小松真明、芹澤圭子、大庭雅子、伊藤従人、伊藤陽子、井上弘二郎、石和加代子、河野光江、村上充彦、峰田光江、土屋弥生、鈴木恵美子、西原京子＝１７名

さわやかハイキング A・B 合同の新年ハイキングだが、本日の話題は山より、頂上での豚汁である。各自あらかじめ分担された材料を準備してきた。各々が各駅から電車に乗り、それぞれに新年の挨拶をした。天気は上々で車窓から見る富士山が実に見事だ。御殿場では雪が積もっていた。小山町に入ると雪はなくなっていた。

谷峨駅で電車を降りた。山市場という所まで約１時間、舗装された道を歩く。道中、東京から車で参加される西原さんが合流した。峰田さんが電車に乗り遅れたが、材料分担のシイタケを豚汁に入れるために欠席することは許されず、息子さんに車で送ってもらい全員が揃った。息子さん、ご苦労様でした。お陰様で、シイタケの入ったおいしい豚汁をいただくことができました。

電車で行く山

谷峨駅で会長挨拶

吊橋を渡り、登りが始まる。地図で見た通り等高線の幅が狭い急な登りが続く。平地では１時間歩いても体は暖まらなかったが、登り始めたとたんに暑くなり汗をかいた。AB 合同だが、登るスピードはＢ隊並みで速い。今日Ａ隊から参加した方はＢ隊でも問題なさそうだ。時折、小田原方面を振り返ると海が見え、朝日で光り輝いていた。急な登りが終わると、いくつもの小ピークを越える快適なコースだった。雪も少し残っていて風景がきれいだ。鳥の鳴き声も一切ない、静かな山であった。

雪の上にはいろいろな小動物の足跡が見られ、楽しい気分になった。ある時、後ろで鈴が鳴ったので登山者かと思ったが、鈴をつけた犬であった。猟犬だろうか。さらに行くと、ルート上の雪の上に赤い血の跡のようなものが続いていた。鮮明な赤色だったので、血であれば、まだ時間がたっていないように思われた。

不老山北峰

トン汁大会

おお～、これは
凄い器

鍋オジさん

ようやく頂上に到着し、待ちに待った豚汁タイムである。後藤さんがリュックにくくりつけてきた直径 50 ㎝はあろうかという巨大鍋をコンロ 3 台の上において、もって来たポットのお湯、下ごしらえ済みの野菜、肉など具材が投入され鍋がいっぱいになっていく。肉は伊藤さんこだわりの黒豚。鍋奉行は天野さん。

味噌の溶き方にこだわりを感じる。全員が入れ物とお箸を持って、今か今かと豚汁の完成を待ち構えている。小さいコンロを別に準備し、もちを焼く。もちは杵つき餅だ。寒いので焼酎をお湯割りにして飲む。豚汁を待っているだけだと飲みすぎてしまうと思い、餅焼きの番をした。やがて豚汁が完成した。作り始めたときは、なんとか残さない程度に作ろうと気にしていたが、無用な心配であった。早い。一気に鍋は空になった。餅も焼けたそばからどんどん食べ、焼くのが追いつかない。

味噌と残った野菜で 2 回目を作る。ここではお餅も入った。2 回目の豚汁もあっという間に食べつくされてしまった。まるで、体育会系の部活をしている中学生のような食欲だ。富士山は雲がかかって全体は見えない。北西には以前雪の中を登った菰釣山が見えた。風が無く、よい天気で良かった。もし風があったら寒くて豚汁どころではなかっただろう。後で集計すると、1 人当たりの費用は１４０円だった。

恒例の、ツエルトで作った簡易トイレを片付け、下山の準備をする。不老山頂上からの下山は、造りの凝った道標に導かれる。カラフルな文字で説明や絵が書かれ、なぜか頭には何かがかぶせてある。はじめは拡声器のカバーをかさの様にして富士山を模していた。その他では、鍋やコーヒー豆の缶や陶器の入れ物など、一貫した趣向で作られていて見つけるのが楽しかった。

文字をゆっくり読むゆとりは無かったが、その形を見ると思わず笑い、それをネタに会話が弾んだ。途中急なところで、310 段の階段があると書いてあったので、数えてみたが 309 段だった。登山道が終わり、旧 246 号線を歩いて温泉に行く途中、まだその道標は続いていて、また笑ってしまった。

温泉は源泉にトラブルがあり、真水を熱しているとの表示があったが、熱すぎでゆっくりと浸かっていられなかった。帰りの電車では、揺れに眠りを誘われ舟をこぎ、何度も床に置いたリュックを倒してはっと起きた。下土狩駅まで乗り、恒例の反省会を駅前で執り行い 1 日の旅が終わった。